

# 新たなる歩みのために

上 廣 榮 治

創立五十周年、記念すべき実りの秋の大会でありました。大会に参加された方々、大会を支えるべく力を尽くされた方々、誰にとつても、今年は長く忘れることのできない、特別な秋の大会となったことでしょう。どの会場においても、五〇年にわたつて倫理実践に邁進してきた歴史への自信と喜びと、次なる五〇年への熱い思いが、一種雲気となつて立ち籠め、五彩に輝いて立ち昇るように思われました。

そんな秋季大会を通じて、私は「初心」と「正直」と「苦難福門」について語りました。というのも、我が会の五〇年を支えてきたものが、この三つのキーワードだったと思うからです。またこれからの五〇年を支えるものも、まず初心に帰ることであり、正直に生きることであり、苦難を福への門とすることだと信じているからでもあります。今回は、この三つの言葉がそれぞれどのように関わり合っているのかを中心に、再度お話ししてみたいと思います。

さて、『論語』の雍也篇に、この三つのキーワードをまとめたかのような、孔子の言葉が伝えられています。「子曰く、人の生や直（なお）し。これを罔（なく）して生くるは、幸いにして免（まぬが）るるなり

（子曰、人之生也直。罔之生也、幸而免）と。つまり、人間というものは本質的に正直なものである。だから、その根幹的な正直をごまかして生きていられるのは、偶然の幸運によるものにすぎないのだ、と解釈されます。

実践倫理でも、人間は「善なるもの」であると考えています。大自然の摂理のままに万物が運行している状態、それが理想的な状態、「善なる状態」です。同様に、大自然の子である人間も、生まれながらにして善なるもの、正直なものであるはずですが、それがそうでなくなるのは、いろいろな不自然が重なって後天的に悪しき状態になってしまったからなのです。

人が生まれながらに「善なる状態」にあることは、大会での「初心」の説明にも引用しましたが、世阿弥の『風姿花伝』の冒頭に語られています。

能楽の稽古は七歳頃に始めるのがよい。下手なことを教えるな。大人の勝手な判断を押しつけるな。それよりも子どもの自由にさせた方がいい。子どもは好きにさせておけば、自然に子どもが本来もっているいい味を出してくる、というのです。誰が教えたわけでもないのですから、そのいい味とは、彼らが生まれながらにもっている「善きもの」なのです。

ところで、人間は本来正直なものであるということは、私たちが日々実感しているところです。嘘をつく悲しさ、人を騙す苦しさ、功利のために自然の情を裏切る切なさ誰でも身に滲みて知っています。正直に、そして倫理的に生きたいという願望が、常に人の心の底にはあるからです。つまり、人は生まれたその瞬間から、自然の摂理のままに正直に生きたいという願望があったと理解できるのです。

私たちの子どもの頃の思い出が、多くの場合、美しく温かい人間関係に彩られているのも、幼い頃の汚れなき「善き」眼と「善き」心に映じた景色であったからに違いありません。

それが、長じるにつれておかしいことになってくるのです。自然の摂理のままに、正直に、つまり倫理的に生きていくと損をするのではないかと、思い始めるのです。学校では他人よりもよい点数をとるためには、多少の不正直があってもいいのではないかと考えます。社会に出てからは、富や地位で他人を圧倒するために、正直も倫理も顧みるかたことがなくなりませう。

常に、他人と自分とを比較するために、相手の知恵や力や富に威圧され、不安に駆られて自分を見失ってしまうのです。本来の倫理的な自分（初心）を忘れ、功利と競争のために、本当は望んでもいない生き方を選んでしまうのです。

しかし、その生はまことに苦渋に満ちているに違いないと思います。いかなる富貴を得ようと、正直に倫理的に生きることが人間の本来的な願望である限り、倫理に背いた生は、人の心を安らかにすることはできないのです。

人間が生来天から与えられた心、つまり「善き心」、それが「初心」です。私たちはいつでも欲望や不安や恐怖によって曇らされ、ねじ曲げられていない自然な心に、立ち戻ることができるのです。「初心」にかえることができるのです。なぜなら、いかに表面が曇り汚れ腐食していても、その中核には生まれながらの「善き初心」があり続けているからです。「善き初心」に立ち戻ったその瞬間に、私たちは正直に、倫理的に生きることの喜びを心の底から感じるはずですよ。

新聞の社会面を賑わしている事件の主役や脇役たちも、自分たちの厚顔無恥な主張を本当に信じているのかどうか、私には疑問です。あれがバレたらどうしよう、これだけは隠しておきたい、この部分については口を割ることはできない……と、怯え震えているのではないかと、そう思われてなりません。

彼らもまた人の子ですから、自分自身の心の奥底では、正直に、倫理的に生きるべきなのだと知ってい

るはずで。とすれば、自分の不正直や反倫理的な行動が明らかになることを、恐れ心配しているはずで。彼らのこれまでの富貴や権勢は、孔子のいう「幸いにして免るる」だけだったのです。その偶然的な幸運の一端が破れて、「高速増殖炉もんじゅ」だ、「薬害エイズ」だ、「住専」だということになってしまったのでしよう。

これらのニュースに接するたびに、私は正直に生きることの幸福を思わないではいられません。自然の摂理に従って正直に生きている限りは、どんな事態が生じようと、心を乱すことがないのです。偶然の幸運がいつ破れるのか、はかり知ることができません。しかし、正直は人間にとつての必然です。福への門に確かに直結しているのです。

人はどんな生き方をしても、幸運と不運とに見舞われます。「禍福はあざなえる縄の如し」とも言います。幸運ばかり、不運ばかりということはありません。しかし、そうだとすればなおさら、正直に生きる、倫理的に生きるということに、不退転の決意をもつて臨むべきだと思えます。断固として、天を仰ぎ、地に伏して恥じるところなき人生を歩むべきです。

なぜなら、倫理に背き徳に悖る偽りの道を歩む者は、不運に遭遇すればたちまちに終わります。一方、倫理の大道を踐む者は、たとえ不運に遭つても動ずることも迷うこともなく、苦難もまた福に至る道であることを知っています。まして幸運においては、倫理の大道を生きる喜びのさらに深いことを知るので。「初心」、すなわち自然の摂理に従い、正直に生き、いかなる苦難不運にあつても寸毫も倫理を踐み外すことのない人生、それが唯一の、最も幸福なる人生であると私は信じております。

秋の大会を終えたいま、新たな明日へ向かつて、同志が心を一つにしてこの道を歩んでいただけることを、心を熱くして願っています。